

# 田麦中畠3・4・5号古墳

## 1 調査の概要

### (1) 調査に至るまでの経過

今回の調査は、市内田麦区が中心となって進める青少年健全育成を柱とし、長丘全体の活性化に結びつけることを目的とした多目的グランド造成に伴い、雑木材の伐採が完了した予定地域を、昭和61年10月20日に分布調査を実施した結果、小規模ながら2基の古墳を発見し、文化庁長官あて遺跡発見通知を提出するとともに、田麦区長等関係諸氏と協議を実施し、発掘調査を行ない記録保存を図ることになり、昭和61年11月1日から同年11月14日の予定で調査を開始した。

### (2) 調査団の編成

調査責任者 嶋田 春三（中野市教育委員会教員長）

調査団長 金井 淩次（日本考古学協会会員、中野市文化財保護審議会会長）

調査主任 横原 長則（日本考古学協会会員）

調査員 池田 実男（長野県考古學会会員）

事務局 酒谷 康雄（社会教育課長）

小野沢 捷（同課長補佐）

徳竹 雅之（同課歴史民俗資料館学芸員）

協力団体 田麦区

参加者 藤沢英夫、金井英男、阿藤英奈、渡辺金治、山田利平、阿藤きみ、阿藤千代江、栗原よしみ、中村宗一郎（順不同、敬称略）

調査の実施にあたり、長野県教育委員会文化課の先生を始め、地元田麦区の役員の皆様には、格別なる御理解、御協力をいただき記して感謝申し上げます。

（徳竹 雅之）

### (3) 調査の経過

11月7日（曇） 伐木してあった埴丘周辺の清掃と、1/100地形測量を開始する。

14日（晴） 清掃と地形測量を続行する。

16日（時雨曇） 清掃作業

19日（晴） 3号墳、清掃作業、埴丘部配石、葺石？など、全体規模明確となる。

20日（晴） 3号墳、写真撮影、埴丘発掘。

4号墳、清掃、写真撮影

21日（晴） 4号墳北方に、敷石帶を確認

5号墳に試掘坑を入れる。

22日（晴） 敷石帶の確認と拉張掘り。

25日（晴時々曇） 敷石帶・3号墳の調査

県教委、小林、芦部指導主事の視察あり。

- 26日（雪） 雪降りとなつたため、林畔1号墳の刈草など燃やして清掃する。  
午後休み。
- 28日（晴） 敷石帯の清掃と拡張。  
5号墳の西側から北方に延長している。  
5号墳、写真撮影、平板測量。
- 29日（曇時々雪）時々雪降って寒し。  
5号墳、中心部発掘、封土小石混在、土器片4、黒曜石片1、出土。  
盛土下は、自然堆積面の礫層で、遺構は検出されず。
- 12月1日（暴1時しぐれ）3号墳、外周配石、平板実測  
4号墳、%、墳形測量  
午後、中心部の発掘に入る。
- 2日（晴） 5号墳、地山上の河原石に掘削具の擦痕、顕著に観察される。  
3号墳、実測図、ほぼ終了。  
4号墳、中央部に盗掘坑、30cm下に石列が存在する。  
土器片6個出土、中央部平板測量。
- 3日（晴のち暴）3号墳、断面図作製  
4号墳、発掘続行。東北—南西の石の位置から、主体部（墓壙）の大きさを推定する。盗掘坑は、幅50cmで、中に表層土が充満し、陥没していた。  
土器細片3出土。  
敷石帯、造り方を組み、水糸を張る段階まで終了する。
- 4日（暴しぐれ）4号墳、掘り下げ、下に敷石帯あり。北方の敷石帯と平面、焼けた石も混在する。土器片4個、北方敷石帯の測図。
- 5日（晴のち暴）4号墳の下層部、敷石帯は、北側概部分1mがとぎれて、墳中に延長し、但し西方に少しカーブしている。  
清掃作業  
北方、敷石帯平面図続行。  
3号墳、発掘初め、中央部に疊集石を確認する。
- 12月6日（晴） 敷石帯、平面図完了。  
4号墳、写真、敷石帯、水糸方眼作り、実測に入る。  
3号墳、写真、発掘拡大、清掃、写真、水糸方眼、実測、配石平板測量  
見学者、松沢芳宏氏
- 12月8日（暴） 5号墳、拡大して掘る。  
栗林II式小形壺口縁破片出土。  
4号墳、下層、敷石帯、水糸方眼測量、断面図作製  
3号墳、中央集石、水糸方眼図終り。発掘再開、底面、黄色土直上、繩文土器片出土。
- 12月9日（快晴） 3号墳、地山面まで発掘、遺構は認められず。  
土層断面図作製。拡大発掘。北側より栗林式壺口縁部出土。

- 4号墳、土層と石の断面図作成、敷石面にトレンチを入れる。
- 5号墳、地山面まで掘り下げ拡大、土器片、地山上の自然石の間に存在する。  
見学者、長丘小学校生徒2年生以上。北信タイムス、黒鳥氏、信毎 依田氏。
- 12月10日(晴) 3号墳、外周配石を残して掘り下げたが、遺物なし。清掃、写真。
- 4号墳、トレンチ掘り、断面図作製。  
盗掘坑、まだ終らず。
- 北方敷石帯、トレンチを入れて断面図作製。石の下から栗林式土器片(無文)あり。
- 5号墳、平板測量する。
- 12月11日(晴のち曇) 北方敷石帯の断面図作製。
- 4号墳、拡張、掘り下げ、縄文土器片2個出土。
- 5号墳東側平板測量。
- 12月12日(晴) 4号墳、断面図作製、写真。  
南拡長部の敷石帯上に、纖維質土器片、南西部、敷石带上に、分銅形打製石斧出土、更に拡張する。  
3~4号間にトレンチを入れる。土器片1個出土する。
- 12月13日(晴のち曇) 北方敷石帯、写真。
- 3号墳、平板測量
- 4号墳、東北部拡張、南西部拡長区、清掃、写真、水糸方眼作り、北西部より赤彩土器細片出土。  
見学者 県埋文センター、田川幸生氏他一名
- 12月16日(雪のち晴) 3号墳、平板測量、断面図作製。
- 4号墳、条痕文土器片、赤彩土器片出土、実測図作製。  
下層、敷石帯、焼石の混合率2割位か。  
道り方、撤去する。
- 12月17日(晴のち曇) 調査終了し、テント、器材を自動車に積んで、歴民館まで運ぶ。

(池田 実男)

## 2 調査の内容

### (1) 中畠3・4・5号古墳の調査前の状況

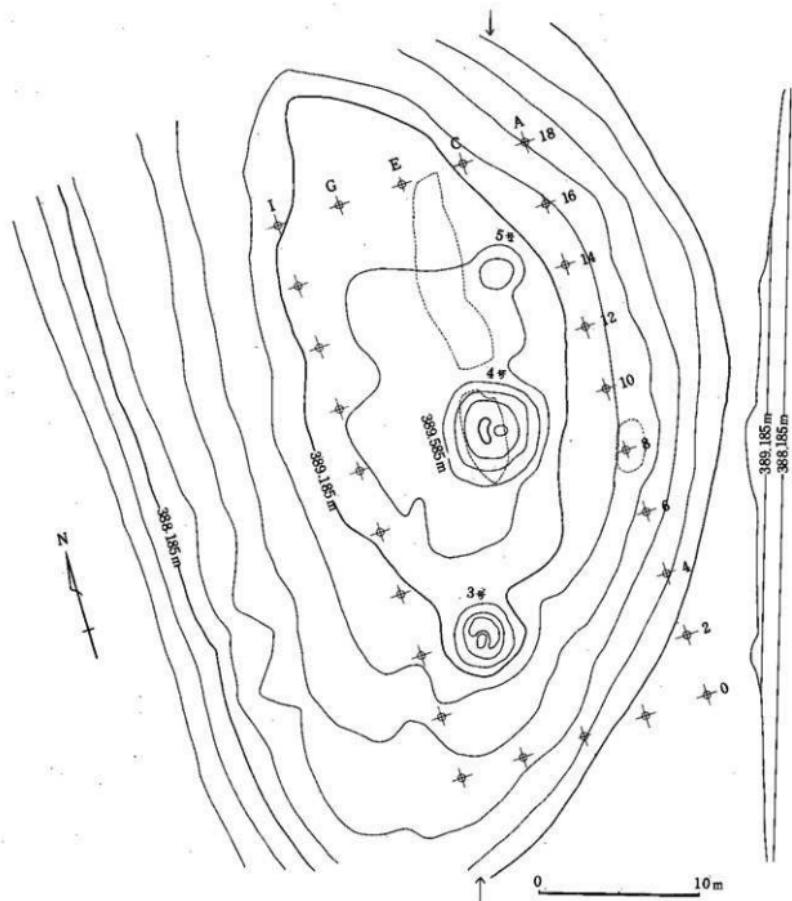
丘陵部に占地した3基の古墳は、南より3・4・5号とした。古墳ではなく土盛状、或いは塚状遺構とすべきものと考えられるが、便宜上この名称を使った。

この3基の古墳は、一直線に、磁北E18°に並び、中心部からの距離は、3、4号間10m、4、5号間9mであり、最高点は、3号389.88m、4号390.18m、5号389.68mである。また5号は、やっと識別できる位の墳丘しかもたず、その後の調査によっても、特に埋葬施設等は確認できなかったが、直線上にあることは、他の2基と関連の有するものと考え古墳として報告することとした。

更に4号墳から北に清掃作業中、敷石遺構が存在することが判明した。これは一部、4号墳築造の

過程で、北側墳裾が破壊されていたが、4号墳の基底部にまで延長しており幅3m前後、長さ30m近いものであった。

また3、4号墳は、中央部が擾乱をうけて大きく凹んでいた。

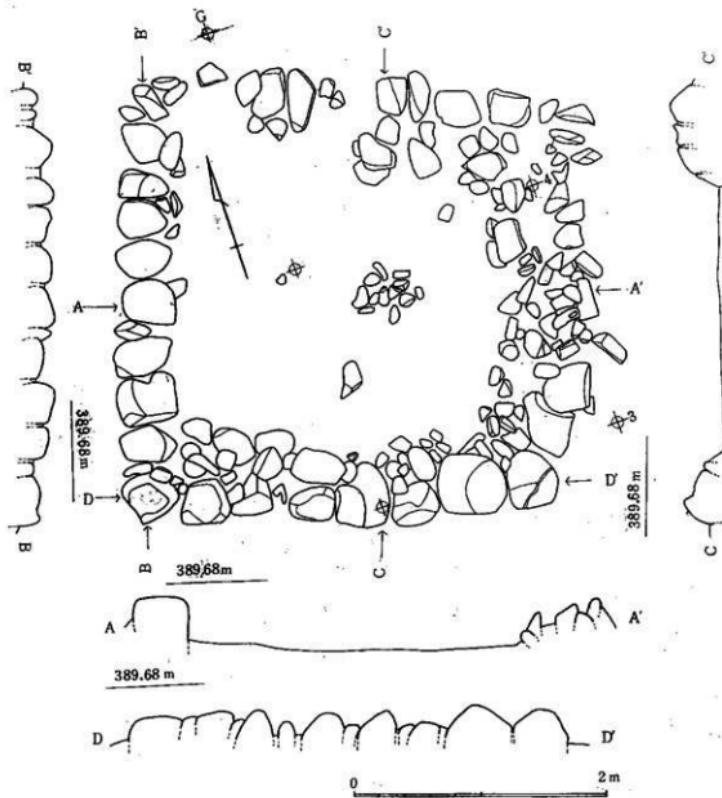


第58図 田麦中古3・4・5号古墳測量図

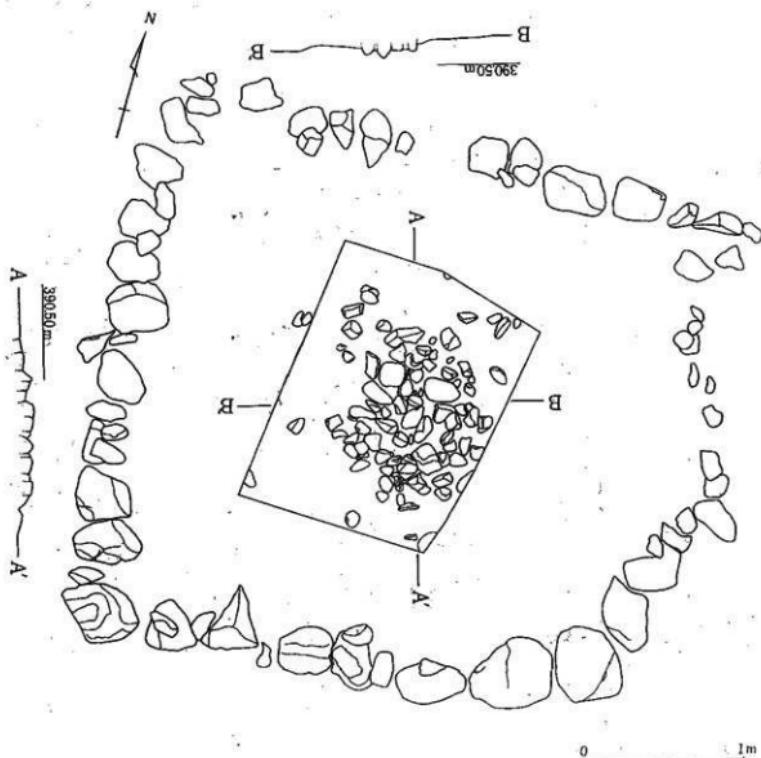
## (2) 遺構

### a 3号古墳の調査

3号は、方形の墳丘をもち、表土をとり除くと西側面、南側面が測定値から推して1辺3.5mの方形の外護石の配列がみられ、東側は、擾乱をうけて石列が乱れていた。この盛土の高さは、0.7mから1m程度と推定される。この配石には、掘削具による、筋状の擦痕がみられ、現代のツルハシや、板鋸等によってできる擦痕と類似していた。径は、50cmを大として30cm前後の石を使用し、旧地表土を



第59図 田麦中歛3号古墳配石遺構図



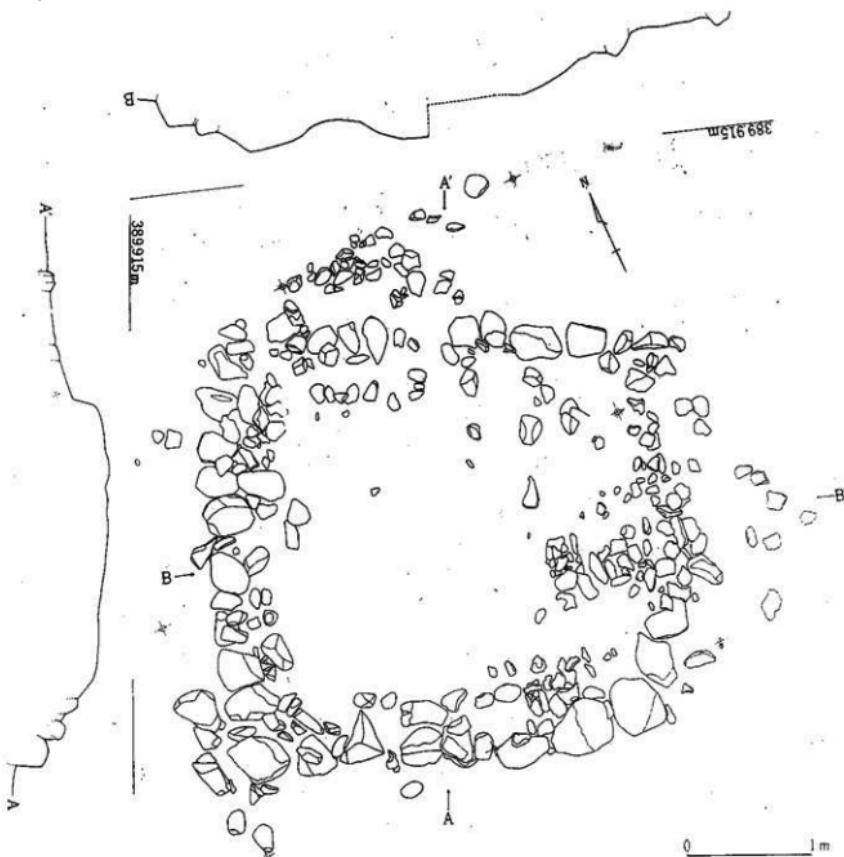
第60図 田麦中戸3号古墳中央集石実測図

除去した面に据えて配列されていた。この石列上段には、葺石状に小石が存在し、土の崩落を防ぐ外護の石とみられるが、欠落した部分もみられた。

中央部の土を、とり除くと深さ50cmに、径10~20cmの石が、約1m<sup>2</sup>集中する個所がみられたが、擾乱掘した層は、さらに、その下層まで達していたと観察される状態で、上層の幅0.6m、深さは0.6m強に達し、「U字状」に大きく、有機質の入った黄褐色の軟かい土が充填していた。この面での未擾乱層は、黒黄褐色土を呈する。この集石から下20cmが黒黄褐色土で、以下、地山の黄色土に変化するが、この面からは、栗林II式小形壺口縁部破片、繩文早期土器片が検出されたが、この面は石列外の平面より、やや下った位置で、地山層への掘り込みは確認できなかった。

従って、内部の構造が存在したとすれば、地平面上に存在したとみられ、中央部の集石が注目されるが、元位置を保っていたのかの疑問点が残る結果となってしまった。

その他の遺物は、須恵質の小形壺の破片などが検出されただけだった。



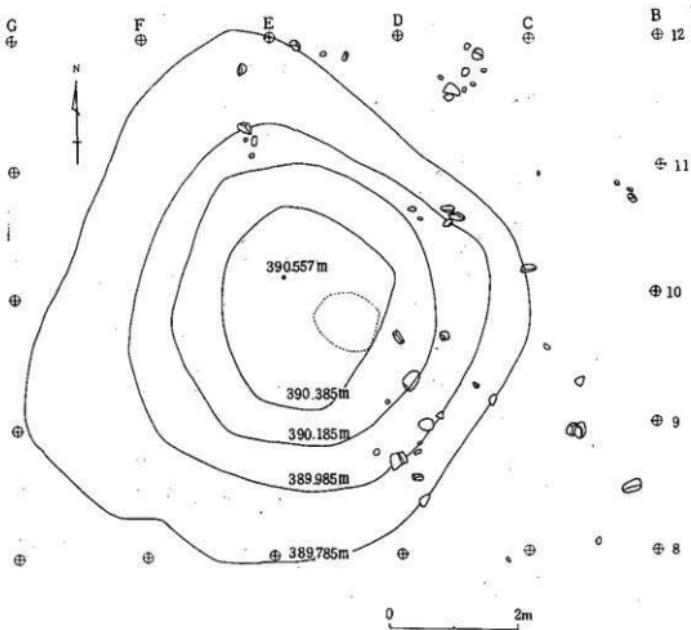
第61図 田麦中戸3号古墳配石平面図

#### b 4号古墳の調査

4号墳は、この三基の古墳のうち中央に位置し規模も最大で、古墳とすれば盟主墳という関係にある。径6.5m前後の方墳的な要素のみられる墳形で、高さは西側で0.6mを計測した。封土の表面には、石が露出していたが特に、まとまりは、みられなかった。

表土を除去して中央部を掘り下げるに、墳頂下30cmで、擾乱層部は東西の方向に幅50cmに縱断して、深層まで達していた。

また東西部には、墳頂下20cmの土中に墳丘にそって、径20~30cmの石が4個並んでいたが、それ以上には継続せず、封土築成時になされたと推察される。それらの石の西側20cm下（墳頂下50cm）に、2個の石が並び、西南方2.8m離れた位置にも2個（大は40×22cm）が並んでおり、この石の間に主



第62図 旧麦中畠4号古墳墳丘測量図

体部が存在した可能性が考えられた。この方向は磁北-E40°の線を示していた。この間には既掘部分もあり、これに関連した遺物は検出できなかった。

この相対する石の下部は、間層をはさんで、北方よりの敷石群の延長部分で、総体的な方向は、やや西方に折れていた。この面まで掘ると縄文中期土器片や、弥生中期土器片、打製石斧など、敷石の間や下から出土したが、破片でまとまりは無かった。この地層は、黄褐色土で以下、地山の黄色土層に漸移する。ここまで調査深度は、墳頂下80cmであった。

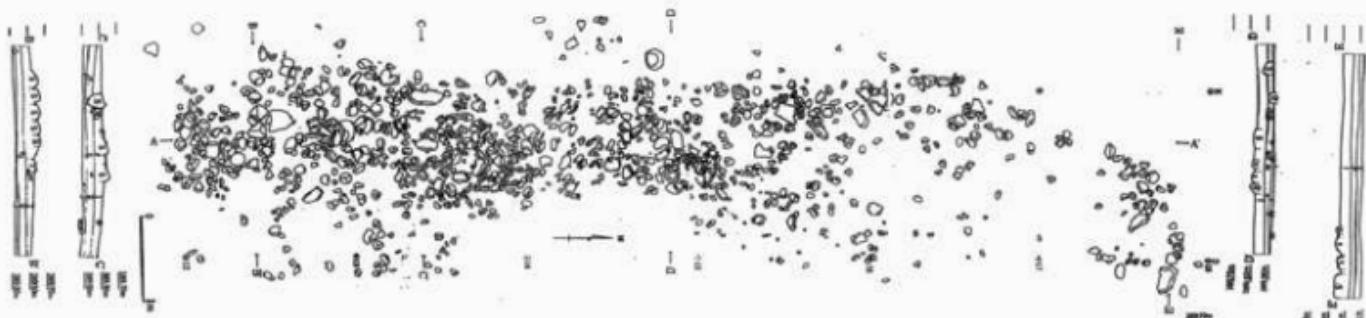


图4-4 四号坑4号单位4号探方中砾石带示意图

土壤剖面  
1 黑土(洪积土)  
2 黄褐色土  
3 黄白土

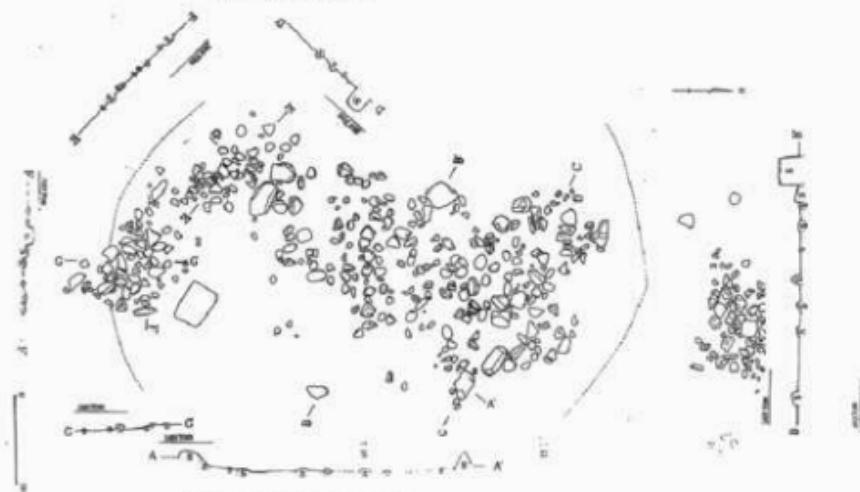
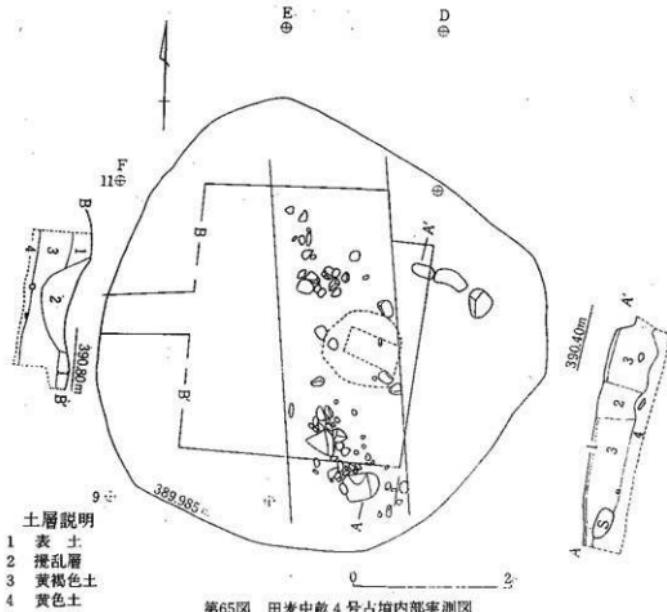
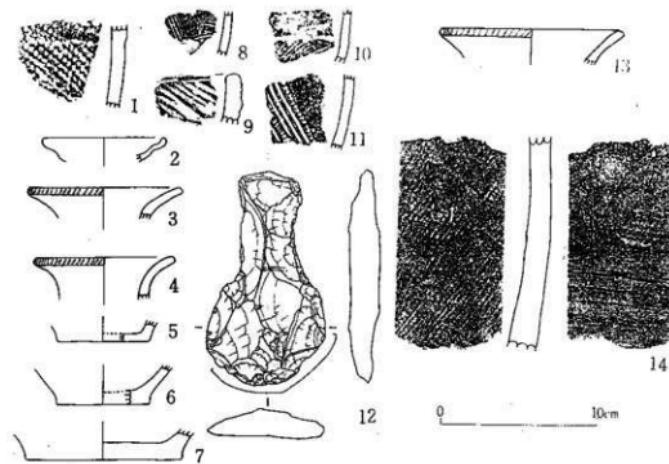


图4-5 四号坑4号单位4号探方中砾石带示意图



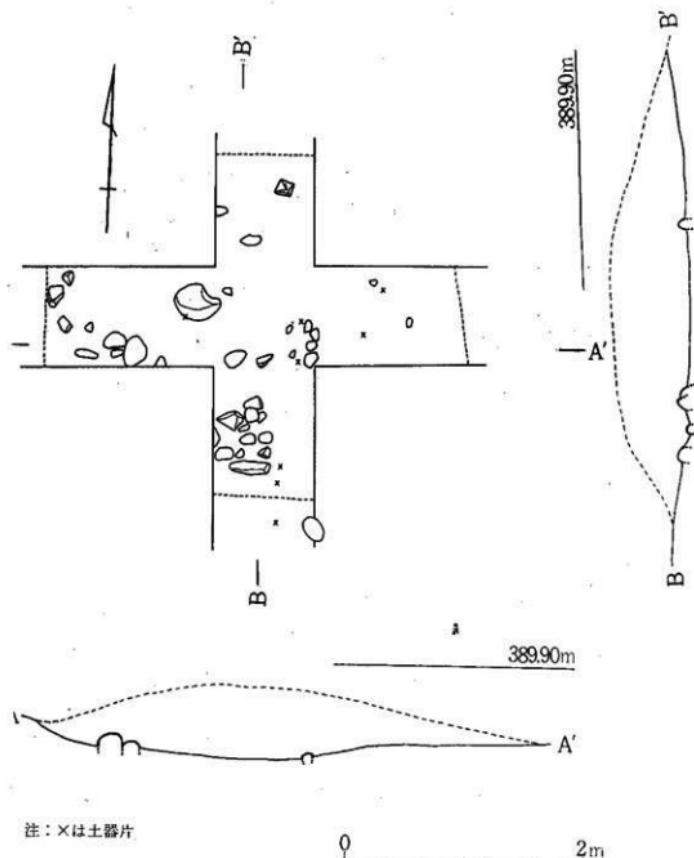
第65図 田麦中戸4号古墳内部実測図



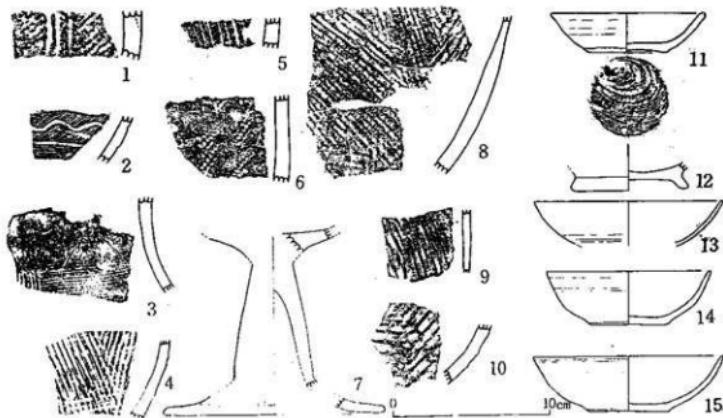
第66図 田麦中戸1・3・4・5号古墳出土遺物実測図

c 5号古墳の調査

小さな土盛りのため、中央部に十字のトレンチを入れて調査したが、特に埋葬施設などは検出されず表土を除いた下の層から、繩文土器、栗林土器の破片が石の間などから検出された程度で、接合関係も無かった。こうして地山上の石の多い面となり黄色土と石で混成された地山層に移行していた。



第67図 田麦中歛5号古墳トレンチ断面図



第68図 田麦中戸採集遺物実測図

#### d 敷石状遺構の調査

この遺構は、丘頂部の高所に主軸方向が、ほぼ磁北に向って敷設されており、4号墳の下部は、やや西に折れた線で、前述の如く4号墳の北側は切断されており、5号墳は露出部の中央東側1mに所在し、当初は4号墳の墓道と推測されたが、4号墳の調査が進むにつれて、下部に同様な遺構が露呈するに及び、この推測も後退した。だが近西の火葬場の関係もあり、この古墳の性格によって考証の余地が残されている。

さて、この遺構は、北辺端部から東方に向って石の散乱が多くみられる箇所があり、東に向って調査を抜けたが、それ以下の地点では、特に顕著な敷石状遺構がみられなかった。この敷石は、幅2m前後、4号墳北側までの長さ12m、以後7m、合計19mを計測している。

さらに横断面のトレンチを入れて観察したが、下部に遺構などは存在せず、黄褐色の漸移層から、黄色土の地山層に変化しており、遺物の検出もみられなかった。採土場の断面観察でも、下層は洪積層の多量の円礫の含んだ地層だった。また4号墳北方の部分全体からも、特に遺物の検出がみられなかつたので、この敷石遺構の構築された年代は、4号墳が塗かれる前から存在した事実から推して、それ以前に求められ、この様な敷石遺構のみられる、市内栗林遺跡の類別から、弥生時代末期の栗林式期の所産の線が濃厚であるが、性格については、祭、葬、いづれにも決定できる資料に欠けている。

#### (3) 遺 物

##### 1号古墳 (第66図1)

縄文時代中期の土器片が、表採された。

### 3号古墳 (第66図)

図示できなかったが、縄文時代早期の押型文土器片1が検出され、栗林II式の小形壺口縁(3) (口唇に繩文押捺)須恵質の小形壺の口縁、破片(2)などが検出された。

### 4号古墳 (第66図)

いづれも敷石状遺構下部から検出されたもので、縄文時代中期、中葉と思われる(9)の破片がある。両者とも竹管状工具の施文である。また(7)は、中期の深鉢底部の破片であり、次は栗林II式の壺と壺の底部破片(5)(6)、条痕文系壺破片(8)などがあり、南西部敷石部下から検出された分鏡型の打製石斧は、安山岩製で植物根などの採質が土器具として使用されたと思われる、これは、くびれ部の弱い形態から、中期中葉から後葉にかけての所産と思われる。

### 5号古墳 (第66図)

縄文時代中期前葉と思われる小型深鉢破片(11)、栗林II式と思われる壺破片(4)(10)が表土の下の黄褐色土層から検出された。

### 付近で探集された遺物 (第68図)

いづれも2号古墳調査中に探集されたもので、2号古墳の所在する東方の丘陵の西斜面の畠地から発見したもので、田疇地籍から厚貝地籍(陣場遺跡)にかけて、各時代の複合する遺跡地であることを見ている。

縄文時代後期土器片(1)(5)(6)いづれも深鉢の破片である。弥生中期後半、栗林式土器、壺破片(2)、弥生後期清水式壺頸部破片(3)、古墳時代中期の高環(7)は、関東の和泉式併行の所産と思われる。叩き目のみられる壺破片(4)(8)(9)(10)は、いづれも内面に当て具縫は観察されない。これは蓋沸用具で、高台付壺(12)系切底壺(11)(13)(14)(15)の食器と共に平安時代の所産と考えられる。

## 3 小 結

3号古墳にみられた方形の外護石をもつ土壺遺構の報告は、中野平岡辺では、知見、類例に乏しく、これを古墳(埴塚)とすべきか信仰に基づく基壇とすべきか意見の分れるところであろう。修法遺跡としては、護摩壇があり、土壺遺構としては、山伏塚、行人塚、念佛塚、十三塚、富士塚、庚申塚、三山塚等があり、起源は鎌倉時代頃からとされ、山丘上に設けられ十三塚、六部塚と称されて群集するものもあり、円形もしくは方形をなし、径は10~20mから5~6m程度のものが多く脆弱な黒色土の水平的な盛上げで築成されており、たまたま古錢類、錫鏡頭、銅鼓などが発掘されるが無遺物のものも多い<sup>11</sup>とされる<sup>12</sup>いる。

これに対して埴塚遺構としての視点から、この類似遺構を求める最近で著名なのは、日本考古学会、その他によって保存運動の進められている静岡県磐田市の一の谷中世墳墓群がある。ここを調査された山村宏氏の「一の谷遺跡について」によれば<sup>13</sup>、「舌状丘陵の南半、南北約210m東西110mの範囲に築かれ、丘陵南半を占地する墳墓は六十余基で一群を成し、南北に走行する丘陵上に、ほぼ

5列の複列的分布がみられる。（傍点筆者）墳墓は盛土による墳丘をもち、平面形は方形、長方形、隅丸方形などを呈し、一辺が3～9mの規模を有する。なかには方形や長方形墳の墳裾を石垣状の積石で囲むもの、貼石状に礫を置き並べたものがある。また二基の墳丘が相互に隣接した状態で接合したもの、墳裾に方形の土壠状造り出しを付設したものなどがある。また墳墓の構造は、六十余基の墳丘は、一辺が3～9m、高さ0.5～1.5mの規模を有し、平面形は、隅丸方形、方形もしくは長方形に整え、墳丘下部は地山を削り出し、上部は盛土した高塚式の墳墓である。墳裾に人頭大の礫を置き並べて墳丘の区画を明示したもの、あるいは二段から三段の石垣状の積石をめぐらせて区画したものが、方形や長方形を呈する墳墓に類型をみると、」とされ、内部構造の調査された三号墳は一辺3.3m、高さ0.7mの隅丸方形墳で、墳頂下約40cmまで盛土が行われ「地山との境界部に南北を向く長さ1.8km、幅1.3mの焼土面と天本科の植物、ならびに竹の炭化物を検出し、この焼土面の中央部直上に、剝刀型鉄器を検出したが火葬骨の検出はできなかった。この焼土面が、いかなる性質を示すものか不明であるが、墳丘を造成した目的との関連から茶毗の痕跡と想定したい。」と報告されており、本古墳調査所見と類似する点が多く肯定される面が多いと思われる。次に私の乏しい知見から拾つてみると、下伊那郡阿智村坊塚例がある<sup>④</sup>。一辺5m程の外護石例と中に二段程の方形石列が存在し、封土の高さは1m内外である。また最近報告されたものに、佐久市大字寺坂、千草場遺跡、近世塚調査例がある<sup>⑤</sup>。間越自動車道用地内で調査されたもので、斜面を利用して構築された基底で、縦約7m、高さ2mの盛土をなし表土直下は、一辺約5mの方形に列石をめぐらせている。中央分部の残存状態は良くないが、基壇状に2段の配石をなしてその下部は、地山を掘り込んで方形に近い七辻を設けている。この土括上面と底面からは、寛永通宝14枚と透明なガラス小玉が1点出土した。この中央部の土括上には、集石が存在していた。以上の例から、中古古墳の築造推定年代は、古代末から近世初頭までの長時間に亘ると推定されるが、更に問題点を整理してみよう。先の一の谷遺跡では、幕製造構が出現するのは、丘陵南半の墳丘を持つ墳墓であり、出土した蓮弁文瓶は渥美半島の製品で、焼成年代は、十二世紀の中頃を中心とした、短期間の製品とされている。これらの墳墓の遺営が終ってから、遺構全域に群集化するのは、火葬による集石墓で、地点をかえて方形墓（小形）や土括墓が出現し、これは十三世紀前葉頃に比定されているから、墳丘をもつ墳墓との間に特別な画期は認められないとされている。この様に火葬墓と土葬墓が併存するのは、葬送墓制上で画期をなすのか検討を要するとされ、集石墓の下限を示す骨蔵器は、知多半島常滑産の小鏡で、その型式は十五世紀前半とされ、墳墓群の終焉期を示す資料は、僅かに発見された一石五輪塔や宝鏡印塔の型式から十六世紀代と比定されている。これが、近世の石塔婆の造立と続くのは衆知の通りである。

この様に、信仰的な施設と墳墓とに2分して考えてみると中には、入定塚の如く両者の中間に位置する墳墓も存在する訳であるが、信仰的な塚の場合は、土地の習俗の民俗学的分野の風習、口碑の採集と古文書の調査によった郷土の歴史が力を借りて往時を復元しなければならないし、墳墓とした場合も文献史学と考古学の成果をとり入れて、中世の葬制の復元と、そこにみられる中世社会の構造が、究明されることが必要と思われる。

庶那藤麻呂氏は、「長野県にあっては比較的古い時期の墳墓は、飯田市新井原、松本市中山蟹塚、上伊那郡宮田村熊野寺例のごとき山地と半畠地の境部分に立地し、中世墳墓は、丘陵頂部や山麓でも比較的高い位置に認められる。」とされ、この観点に立てば一の谷遺跡例と4号墳の類似から、大まかに中世の遺構であると想定されてくる。さらに一の谷遺跡例の如く後続した墳墓がみられないの

は、遠江国府としての地理的条件を具備した一の谷と、周囲にその様な都市的集団を持たなかった遠いであり、後続する氏族集団を持たなかつたためだろう。さて、昭和21年に地元田畠の江本庄一郎氏宅より、杉箱に入れられて約百五十貫、(562.5kg)約15万枚が出土<sup>(1)</sup>、更にその後、昭和27年5月日にも同じ庭先から同量の古銭の出土があった<sup>(2)</sup>。と伝えられ、下限は、明鉄の洪武通宝とされている。

この埋蔵者と、この塚の築造者を結ぶ線は具体的には何も無いが、この様な備蓄が可能な支配者がこの地にみられる事は事実である。このような支配者と被葬者は同一と仮定され乱世の時代を背景として後続墓の築造が絶したものと考えられる。また、埋葬墓(4号墳)修法塚(3号塚)などの組合せなど、いろいろな想定が成り立つなど、仮定の上に諸々推論を重ねてきたが、該地方は川中島における甲越争奪戦にみられる如く、興亡、流離、争乱の時代を経てのことや、この地方の中世墓制への研究のアプローチがまだ不足している点から、各分野からの視座を集めて、このような塚状(土盛状)遺構の性格を究明したいと思われる。

(檀原長則)

#### 引用文献・参考文献

- 注1 望月重弘「遺跡」『新版仏教考古学講座第一巻総説』雄山閣 1984
- 2 金井汲次「茶臼峯・大久保窯址発掘概報」1964『蒼丘雜史抄』よりによれば、中野市草間、茶臼峯1号古墳(径6.6m、高さ0.4m、1031番地)2号古墳(径5.5m、高さ0.4m、1029番地)3号古墳(径5.6m、高さ0.4m、1026番地)4号古墳(径5.4m、高さ0.3m 1026番地)は、丘頂上に24~28mの間隔で所在し、昭和38年(1963)年12月5・6日開墾に先立ち発掘調査されたが、遺構・遺物の検出なく、宗教的か、茶臼峯廢址に統く旗塚等の土盛遺構ではないかと、考えられている。
- またこの地方のこの旗塚遺構と思われるものは、更科峯頂上切通し両側部分、苔峯、石尊社道路、峠路両側、新野小曾川城址旗塚坑山(1基)柳沢棚平旗塚、岩井下山旗塚群などがみられるが、これらの築造された年代の検討・意義などの討議は、今後に残されている。
- 3 山村宏「一の谷遺跡について」『歴史手帖』14、11名著出版 1986。
- 4 下伊那郡阿智村坊塚「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」長野県教委1970
- 5 白田武正「近世塚」『長野県埋蔵文化センター一年報4』1987
- 6 遠那藤麻呂「火葬墳墓の立地と分布」『新版仏教考古学講座』
- 7 日比野丈夫「長丘村出土古銭調査」「下高井」長野県教委 1953
- 8 金井汲次「長野県中野市出土の古銭」『信濃』III12、5 1960

# 図 版



図版 1

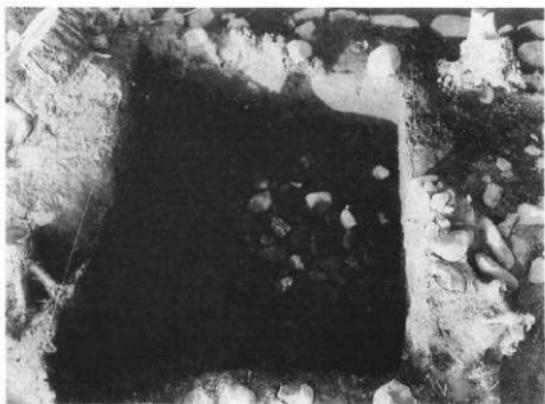
1 田麦中畝 5 号古墳（左側）  
同 4 号古墳（中央）  
敷 石 帯（北方より）



2 田麦中畝 3 号古墳



3 同 上  
中央集石部分



図版 2

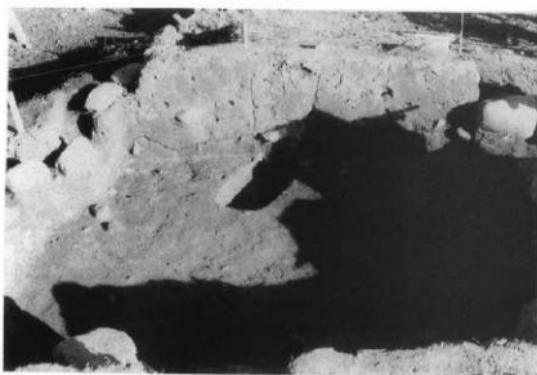


1. 田麦中段 3 号古墳  
西壁断面

2. 同 上  
外周石



3. 田麦中段 4 号古墳  
中央部東壁

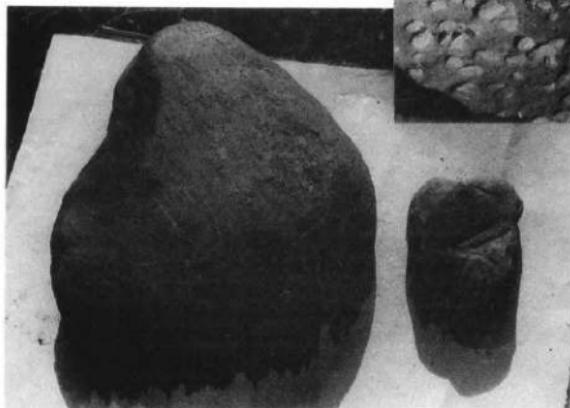




1. 田麦中戸 5号古墳  
中央部断面図



2. 田麦中戸 5号古墳  
手前 4号填



3. 田麦中戸 3号古墳の  
擦痕のある石



### III 考 察

#### 1 中野平の主な古墳のあり方

中野平の主な古墳の分布を地域的に分けて概観すると、西部丘陵の南、草間、立ヶ花地籍の丘陵上に点々と所在する古墳がある。これらは、前面の延徳低湿地、小布施町の北部から千曲川の沿岸の地带を基盤として成立した古墳と考えられ、そのうち立ヶ花1号墳（円墳、径14.5m、高さ2.6m）2号墳（円墳、径31.6m、高さ4.6m）3号墳（円墳、径20.5m、高さ3.5m）などは、前面に千曲川を望む丘陵の南面に位置し、この両岸の地带や千曲川にかかる漁労や交通の権益を握る集団の權力者の墳墓とも想定されるが、その東方に谷をへだてて高所に位置する京塚古墳と西山古墳は、主墳と陪墳の関係にあるとみられるが、西山古墳を除いては、この地带の古墳の内部主体は不明で、問題は今後に残されている。これらの古墳の編年代の位置は、西山古墳の木棺直葬の粘土床とみられ、直刀の存在からも、五世纪後半から六世纪までの築造と考えられるが<sup>(1)</sup>、七世纪に入ると、これらの古墳の立地する背後の小丘陵に須恵器焼造窯が築造されてくる。

次の構成は、中野平の東南部の派出された尾根上に立地する古墳で、延徳地区から中野東部に至るもので、編年代の推定可能な古墳は、金鎧山（円墳、径東西17m、高さ東方より2.6m）と姥懐山古墳（円墳、径17m、高さ1.5m）である。金鎧山古墳の年代は、別項の如く六世纪第一4半期の築造とみられ<sup>(2)</sup>、姥懐山古墳の年代は、出土した撰文鏡から、五世纪から五世纪前半までの築造と考えられている<sup>(3)</sup>。このほか古墳の内部主体は未調査の高遠山（全長55m、後円部高さ4.5m、前方部高さ2.8m）蟹沢、両古墳は、外形測量が行われている<sup>(4)</sup>。このため、この視点からの築造年代の推定は、或る程度可能である。始源期の首長の墓が前方後方墳で初まる例は、古墳文化受容地のそれぞれの地域で多くみられる現象で、この地方でも箱清水式土器文化を基盤に発展させた在地の農業共同体の小首長が、墳形を便化させた前方後方墳（前方後円墳）を築造したと考えている。この古墳文化の流入経路は、北陸方面に求める説が有力である。

桜沢、大熊地籍間の尾根上に築かれた蟹沢古墳〔長さ48m（36m）後方部高さ5m〕は、現在、後方部の径と前方部の長さが同じか、僅か後者が長いのでは、の見解が出されており、長野市姫塚古墳、松本市弘法山古墳などの前方部の様相によりやや長く後出的な見解も出されている。

低い尾根の先端部に築造された高遠山古墳は、現在、西側部分が採石のため大きく掘削され、昭和63年4月25日には、現地で保存問題について協議が行われている。この古墳は、前方後方墳と後円墳の両要素のみられる古墳で、蟹沢古墳より前方部が整っているが、基本的には大きな差違は見出せない。従って内部主体の判明しない現在、展望のきく高所に立地する蟹沢古墳の成立が一応先行するのではないかとみている。この古墳の上部尾根上に三基の古墳がみられ、そのうち桜沢4号墳（径20m、高さ3m）を中部電力の鉄塔建設のため、発掘調査を実施されたが、内部主体は破壊されて小板石小口積の小石室の一部分が残されていたのみであった。後続とした高遠山古墳とは、存立の基盤が共同体の首長とした場合、異なっており、今後の調査によって逆転の可能性も考えられるが、両古墳の築造年代は、四世纪直前から五世纪までの年代と推定したいのである。

この様に、この地方の古式古墳が、この中野平の東南部にみられることは、古代の開発状況や政治

中野平の主な古墳

- 1 七瀬双子塚古墳
- 3 " 3号 "
- 5 " 5号 "
- 6 田麦林畔1号 "
- 7 " " 2号 "
- 8 厚貝山ノ神 "
- 13 新井大ロツ遺跡
- 14 蟹沢 古墳
- 15 金體山 "
- 16 高遠山 "
- 17 姥懐 "
- 18 栗和田1号 "
- 19 紫岩 "
- 20 立ヶ花2・2号古墳
- 21 京塚 古墳
- 22 御獄山 "
- 23 赤岩 "
- 24 八幡塚 "
- 25 小丸山 "
- 26 日向1号 "
- 27 勘介山 "
- 28 五里久保1号 "
- 29 夜間瀬本郷1号 "



史を知る上で参考となる。

これらの中野層状地の末端部尾根上に位置する古墳に対して肩頂部の、箱山の支脈上の尾根に栗田1号墳（円墳、径21m、高さ2m）と紫岩古墳（円墳、径19m、高さ2m）が存在する。栗田1号古墳は、昭和62年秋の開発に伴う事前調査で墳裾の試掘坑より土師片の出土、旧地表面からの河原石の出土、斑点状の混合を示す盛土層の状態から、古墳との確認が得られた。この古墳から望見されるどの範囲に、この古墳の被葬者の居住し支配した地域を認めるかによって編年観が違ってくる。層状地上流部の立地を考慮すれば、姥猿山古墳より後出的な要素が強いように思われる。

次は中野市街地より北部の方面を基盤として出現する長丘丘陵の厚貝、田麦、七瀬の古墳群で、この中には、この地方の群集墳の初見とする七瀬古墳群の存在など別の角度から検討を要する古墳も存在する。これらの古墳が築造された時期は、五世紀中半から六世紀までに集中して短期間に特色ある古墳が築造されており、この背景について筆者らも論及したことがある。この時期は、汎日本的に中小古墳の築造が増加する時期もあり、今回の調査結果をみても両一的な結論は見出せず、この地方の古代の社会構造の完明には、各方面からのアプローチが必要と思われる。

さて、この丘陵は、開発の進展に伴い未調査の古墳は、二基を残すのみとなつた。厚貝山ノ神古墳（方墳？、径32m、高さ4m）、林畔二号墳（方墳？、径27m、高さ南より2.5m）は、ほとんど主体部のみの調査だったから、やや問題を残している。林畔1号墳、七瀬双子塚は、学術的用意が無くて発掘されたため、さらに、多くの問題点を残している。今後、再調査の機会に恵まれれば未知見の検出事例が多いと想定されている。

これらの古墳の年代別配列は、七瀬双子塚、山ノ神古墳、七瀬三号墳、林畔二号墳、前山古墳、林畔一号墳、七瀬五号墳、と考えられ六世紀までには築造が終了していたと考えられるが、今後の再調査によっては、入替も考慮され、これらは、墓壇のあり方、副葬品のうち、馬具の形式、供獻上器のうち初期須恵器の年代などを総合した編年観から、慎重に決定されたいと思われる。このうち七瀬双子塚は、中野平は勿論、下水内郡豊田方面までも眺望できる、この丘陵の最高所（453.7m）中野層状地との比高差100mの好位置に築造されているので、同族集団を多数かかえた、この地域の首長墓と考えられ、出身の差など被葬者の生前の位置が古墳造営地の優越に反映していると、みられる。これらは、項目を更めて考えてみたいと思う。

これに後続する、この地域の首長クラスの墓は、また東南部に移動して、金燈山古墳（円墳、東西17m、高さ西より1.9m）となる。南西の墳裾から発見された陶邑産の初期須恵器の年代から、從来からの編年観を倒古させる要素をもっている。これは最内地方から移住した権力者の伝世品と解釈すれば、六世紀初め頃の築造と考えたい。

この次に編年したい古墳は、前にもふれた紫岩古墳で、夜間瀬川に面した尾根上に立地し陶邑I型式に入る須恵器を伴出している。これが地方窯の生産であっても六世紀前半までに築造されたことは確実で、同じ古墳群に包括される山ノ内町本郷の夜間瀬古墳群の前段階の統率者の墓とみられ、安山岩の露出する岩山を切断して墳丘を築造しており、この点は積石塚と変りない。

中野層状地には、後期に属する石室墳は、現在のところ発見がなく、高社山麓や山ノ内町方面に類例がみられ、群集してみられるのは夜間瀬本郷地区で、夜間瀬1号墳（円墳、径南北26m、高さ6m、石室全長10m、羨道幅1.2m、玄室奥行4.8m、幅2.7m）は、大きな自然石を使用して石棺を築いている。これらは、後期古墳築造期の最盛期、六世紀後半の年代を与えられており、今後この大規模

な土木工事に従事した築造技術者の系譜などの究明が必要と思われるが、中野扇状地に比べて、やや寒冷と思われるこの地に、この時期の古墳がなぜ築かれたのかの要因は、馬匹の飼育にあったのではと考えている。林畔1号墳、金鏡山古墳などにみられた馬具の副葬品から、早くからこの地方の馬の飼育が考慮され、後の鎌倉時代にみられる中野御牧、笠原牧などの牧場経営の始源が、この期に初まつておりこれらの風習に馴染んだこの地方での新興勢力によって、この古墳群が築造されたと考えたい。夜間瀬一号墳は、早くから開口されて副葬品は知られていないが、須坂市日滝本郷大塚古墳は、昭和56年の、広域農道開設に伴う調査で、破壊された石室内から珠文鏡1面、刀15振、骨の部分7セット、耳飾り、須恵器环など豊富な副葬品が検出され、この壺蓋の宝珠鏡の形態から、七世紀後半頃の終末期古墳であるとされている。<sup>15)</sup>

この様に、両者には編年上の差異が認められるが、地名が本郷と呼称され当時の郡司署クラスの居住地の可能性があり、高井地方の古墳も、このような一部の支配者クラスの墓を除いて、小規模な石室（郷）墳に変化し、古墳が消滅するのは、大化の薄葬令はともかくとして律令体制の強化によって益々この地域の政治支配が、中央集権化し貢租や防人の徵発など支配体制の強化が、在地の勢力の大規模な古墳の造営を困難にした背景と思われる。

#### 引用文献

- 注1. 松沢芳宏 「飯山・中野地方の前期古墳文化と提起する諸問題」『信濃』35、3
2. 西方墳掘より出土した初期須恵器によって、五世紀第四4半期の可能性もある。
3. 摂稿 「姥懐古墳出土遺物について」『高井』61号 1982
4. 田川幸生・松沢芳宏 「蟹沢古墳・高遠山古墳・姥懐古墳」 長野県史考古資料編主要遺跡 北東信 1982
5. 須坂市教委地『シンポジウム須坂の古墳文化を語る』 1987

## 2 中野平の陪塚にみられる古墳と七瀬双子塚古墳

中野平周辺で、主墳と陪墳の関係にあると推測される古墳は、次の三例がみられる。

(1)中野市草間、京塚古墳（円墳、径30m、高さ 2.2m）と、この北東約40mに位置する西山古墳（径11m、高さ1.3 m）で、ここより昭和24年、長さ86cmの直刀が出土している。七瀬5号古墳第2主体部出土と、林畔2号墳出土の直刀と類似点の多いもので、この古墳の築造年代を示唆している。五世紀後半から六世紀までに延徳低湿地西縁から、小布施北部方面を基盤として成立した古墳とみられるが、主体部の内容が判明しない現在、具体的な被葬者像は不明である。

(2)中野市新野 金鏡山古墳（円墳、径21m、高さ 2.6m）この古墳に至る尾根上に、下から、新野1号古墳（円墳、径16m、高さ 2.5m）中段に新野2号古墳（円墳、径13m、高さ 2.5m）が存在し、主墳の立地条件が限定されている処だから、この様な位置に構築されたと思考され大正14年に道路を開削せんとして新野2号古墳が発掘され、小石室内より、劍身2、鐵鏡残片1、土師器破損が発見され、同1号墳からは、土師器片を検出したのみとされている。<sup>16)</sup> この様に位置と副葬品の較差から主墳と陪墳の関係にあると思われるが、これ以上、從者か同族関係かの被葬者の実像にせまることは困難である。

(3)七瀬双子塚古墳（前方後円墳、全長61m、後円径33m、高さ4.5m、前方部幅25m）この古墳は、県内の千曲川東の最北の前方後円墳として知られている。この古墳の北裾には、盛土採取の切断部がみられるが、これを含めて墳裾より北方24.7mの位置に陪塚1号古墳（円墳、径16m、高さ1.5m）さらに北約18mに、陪塚2号古墳（円墳、径7m、高さ1m）が所在する。この二者の較差は、身分の差を現わしていると考えられ、七瀬集落から、この双子塚に至る間にみられる前山古墳、七瀬2号、3号、6号古墳の被葬者とは、同じ集団であっても従属と從者と立場の違う人々の差が現わされていると考えられる。

さて双子塚の被葬者の性格を知るには、出土遺物の攻克が有意義と思われる。今回の調査に関連して出土した珠文鏡を観察する機会を得たので報告する。

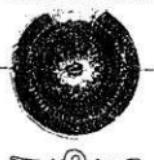
直徑8.3cmの小形の部類で、中央で差3mmの凸面鏡で、平縁の厚さが3.2mmから1.8mmで、均等でなく、この薄い部分が欠損している。平縁部は円く磨滅しており、鏡背には外より素文帯、鋸齒文帯、素文帯、鋸齒文帯、珠文帯となっており、ここにみられる8個の乳座は、やや均整を欠いて配置されている。紐の径は、1.2mmを計測し部分的に鉄錫の附着が認められ、金質、技法とも佳良とはいえない小形仿製鏡である。以上が私の所見の概要であるが、特に私の注目を集めた個所があった。それは紐の孔の片側が後をなして凹んでいることで、これは硬質の紐で吊り下げられて移動などで頻繁に磨擦しなければ、このような磨滅痕が発生しないものと考えられるもので、これは全体に手づれ感の、みられることと一致している。この鏡は決して儀式の時のみ用いられたり、死葬して伝世されたり、鑄造後しばらくして埋納された鏡で無かったのである。このような事実から次のことが思い出された。小林行雄博士の『古鏡』に書かれた『日本書紀』「景行記」四十年の条、日本武尊が、船で上総（千葉県）に渡るとき、大鏡を船にかけて進んだ物語、「仲哀記」八年の条の仲哀天皇が、筑紫（九州）に向った時、岡県主の祖の熊鷹や伊都県主の祖の五十述乎が、船の舳に白銅鏡と剣と玉をとりつけた賢木をたてて出迎えた物語など「伝世鏡論」に引用されたものだが、古代史家の多くは、服属首長の祭祀権を奪う意図のもとに「神宝」を獻上した服属儀礼と考えられている<sup>②</sup>。鏡のもつ性格は、国、時代によって変化するが、鏡のもつ呪的効用から、まつりに使用され、征服と服従の両面に使用される場面が多かったと想像されるのである。この五世紀中半の時期に畿内の前方後円墳の変遷（編年）にも軌を同じくした前方後円墳が、この地域に出現したことは、大和王權が、五世紀、東国即ちこの地方に進出した際には、これまでみてきたような場面が展開されたと思われ、武人的色彩の濃い長方板革綴短甲の副葬などに反映していると思われる。前方後円墳の築造も大和王權に規制されていた場合、これに服属或いは、直属する集団の頭領（県主）の幕と考えることができ、想像の域を出ないが、この被葬者を中心とする集団は、朝鮮半島の出兵にも参加し或いは、越後方面への要衝の地の首長として、この鏡を携帯して、この方面にも活躍する場面が多かったと推測したいのである。この首長の死によって、この集団の過去の栄光を秘めたこの小形仿製鏡を埋納したものと考え、墳丘規模から推して貧弱な鏡の由来を想定したいのである。

#### 引用文献、参考文献

注1. 森本六爾 「金鏡山古墳の研究」 雄山閣 1925

2. 岩崎折也 「鏡・劍・玉と『三種の神器』『東アジアの古代文化』

大和書房 1987



第70図  
七瀬双子塚古墳出土珠文鏡

### 3 七瀬双子塚古墳採集の円筒埴輪について

昭和38年、西部丘陵地帯で牛の集団飼育が中野市農協が主体となって計画された。このため採草地の開発が計画、実行され、土壤調査をこの丘陵一帯で行なった。その際、双子塚の墳丘西側、後円部附近の葺石帶附近より採集されていた破片を、本年に入って復元したものが、第71図の円筒埴輪である。過去にも時々埴輪片が採集されており、長野県史考古資料編の双子塚の項にも径20cm前後の大きさで、更埴市の森2号墳の埴輪に似ていると指摘されている。円筒埴輪の配列は接続せずに、葺石帶と結びついて配置されていたと予想させる状態と考えている。

この円筒埴輪は、  
直径約18cm、残存高  
36cm、推定高さ50cm  
前後、凸帯は、底部  
より10cmの位置にあ  
り、基部1.7cm、幅2.  
2cm、端部厚さ0.4cm  
の端部のまるい台形  
状を呈している。そ  
の上19cmに、破損の  
ため不确定であるが、  
もう一条の凸帯があ  
ったと思われる。下  
の部分は直立し、こ  
の中間部が、削られ  
て凹んでいる部分と  
直立した部分が見う  
けられる。貼付凸帯  
のため剥離して、一  
部分しか残存しない  
が、2段凸帯と思わ  
れる。底部の器厚が  
2.5cm~3.3cmに及び、  
中間の器厚は1cm前  
後で、下部は1.5cm  
と厚くなっている。  
口縁部は復原できず  
形態は不明である。  
内面下部には、輪重  
痕がみられ、ナデ、



第71図 七瀬双子塚古墳出土円筒埴輪

オサエ、から、上部には、横方向に八ヶ目痕が残っている。外面下部は、ヘラ削り、上部には、ハケ目痕が縱方向に残っている。また下部で幅9cm、高さ33cmの縦長の範囲に黒斑が認められる。他の色調は、褐色から赤褐色を呈し、胎土には小石などが認められ、胎土、技法、焼成など粗雑な印象をうけ、残存部位からは、透孔は確認されていない。

「土口將軍塚古墳」1987の矢島宏雄氏の「善光寺平の埴輪」によれば、「森將軍塚古墳の凸帯の突出度が強く、その製作にあたっては、「善光寺平型埴輪」と掲載されている擬口縁状の造りだされるもの」の以外の普通の円筒埴輪は、貼付凸帯で、黒斑は、川西編年Ⅷ期古相とされる藤村1号墳を除いて認められるとされている。

長野市、更埴市にまたがる土口將軍塚古墳からは、須恵器工人の影響とみられる「叩き」のある埴輪、竪描線刻文様のみられる埴輪や、配列の位置によって様相の異なる埴輪が検出されたと報告されている<sup>(1)</sup>。

この様なことが、双子塚古墳の場合にも適用されると仮定したら、速断はできないが、今のところは、存地色の強い円筒埴輪であると認識され、川西編年Ⅸ期の埴輪をもつ上口將軍塚古墳に後続する年代を与えてよいと思われる。このことは滝沢誠氏の教示によれば、七瀬双子塚からは、長方板（三角板）革縫短甲片が出上りし、土口將軍塚古墳のものも同例ではないかとされている。これは、三角板革縫短甲（林畔1号墳）に先行するもので、盛行期は、五世紀前半といわれ、後者は五世紀後半の年代とされている。従って円筒埴輪の様相、長方板革縫短甲の存在から、七瀬双子塚古墳の築造年代を從来の六世紀初頭を中心とした編年觀から、半世紀近く逆らせる見解が有力となった。

#### 引用文献

- 1.長野市教委、更埴市教委「土口將軍塚古墳」 重要遺跡緊急調査 1987

## 4 長丘丘陵古墳群の主体部のあり方と頭位方向について

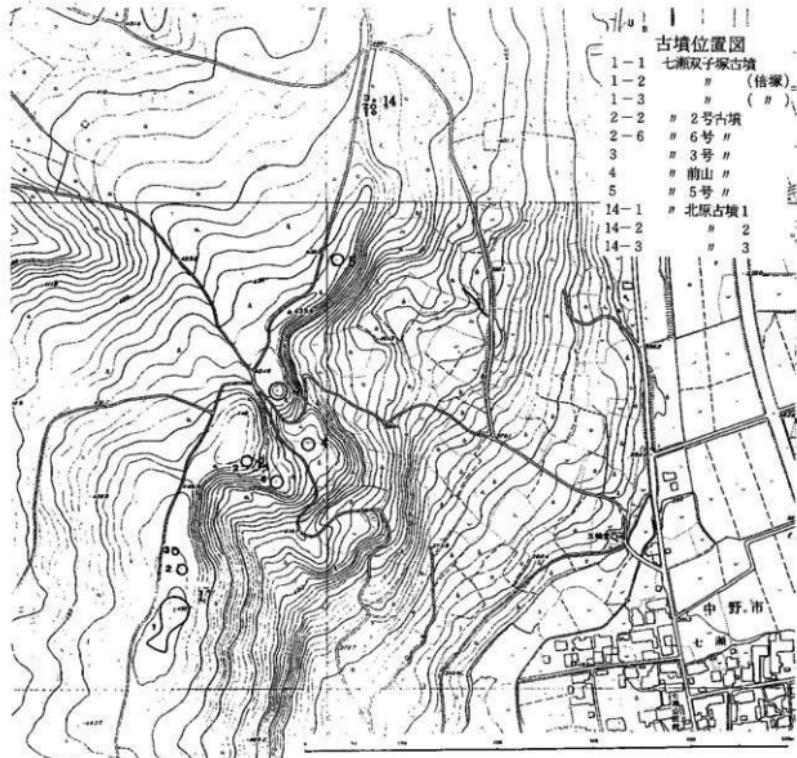
中野平の最古式と思われる蟹沢古墳や、高遠山古墳の内部構造が未調査はため知ることは、できないうが、礎床の設けられた松本市弘法山古墳や、竪穴式石室に割竹型木棺？の設備をもつ更埴市森將軍塚古墳等の構造の墓坪をもつものと仮定している。

この墓坪を小口積で石室を築くことを省略して、単に墓坪を掘って割竹形の木棺を安置する形式が、この長丘丘陵の五世紀に築かれた古墳の特色の一つで、発掘された（1）厚貝山の神古墳、（2）田麦2号古墳（3）七瀬5号古墳（4）同3号古墳（5）前山古墳（6）七瀬6号古墳が、同じ棺体をもち、（7）七瀬双子塚古墳も類似した遺構をもつものと想定されねおり、現在後円墳頂部に石など散乱をみないことや、大正10年の発掘調査にも石室の存在が確認されておらず、これを裏付けている。また（1）と（2）では、墓坪の大きさは確認されていない。（5）（6）は、墓塚の大きさが確認されたが、棺体部の確認は表土が浅かったため、木棺や箱造成のため確定できなかつたなどが指摘されている。これらの古墳に先行すると思われる、中野平東南部の姥懃山古墳にも、特に棺床設備が発見されていないので、これらと類似した木棺直葬とみられている。

これに対して、中野平では、やや後出して平盤石を使用して石室を造り遺骸を納める古墳が出現する。（1'）田麦林畔1号古墳（2'）金鐘山古墳（3'）紫岩古墳（4'）柳沢小丸古墳？などがあり、使用された石材は、類例全部この地方に産する安山岩の平盤石で構築され、このうち平盤石を平面的

に使用して構築される（2）'（4）' 方式と、小口積と平面使用の両方のみられる（1）'（3）' 方式に大別され、さらにの中には、合掌形の上部架設をもつ金鎧山古墳や、林畔1号墳がみられ、北信濃に多いこの類型の古墳の初源期の資料として注目されてきさ。林畔1号墳が、2号墳と60cmの距離で存在し、1号墳は、ほとんど人工的な盛土墳とみられるのに対し、2号墳は、盛り上りをみる地山上に築造されたとみられ、立地からみると優位にある。だが一応2号墳の築造が先行し、副葬品などの検討から、時期差もあまり無く築造されたとみられている。このことから、この時期には、同時に2系統の墓室造営の古墳が存在したと考えている。これは石室造営の変遷の流れの中での現象か、氏族集団や出自の差が、顕現されたものか、この段階の古墳については、慎重なる検討が必要と思われる。

次に頭位方向について検討してみると、この地域の墓坪をもつ削竹型木棺葬と思われる主体部には、例えば、群馬県前橋市朝倉の天神山古墳（前方後円墳、長さ129m、前期）の後円部にみられるような大規模な粘土椁は、確認されておらず、七瀬3号古墳の如く棺床部分を堅固に築造し、側壁部分も



第72図 七瀬地区古墳位置図

これに準じて、土を堅く締めて棺床部を安置したと観察された。この場合は、特に盛土部分に棺床部が設けられたため、留意してこのように施行されたとみられている。このように設けられた墓なり、主体部の頭位方向が、北東に位置する高社山に向っていることは、昭和50年（1975）調査された前山古墳以来指摘されてきた。<sup>10</sup> このことは、七瀬古墳群全般にみられる顕著な現象で、厚貝山の神、田麦2号墳は、畿内地方の古式古墳に多いとされている。<sup>11</sup> 北頭位を採用しているが、高社山を意識しているか否かの線は、不確定である。

高社山は、善光寺平の北辺、中野平と飯山盆地の間に噴出した火山で、美しいコニーデ型の山容は、善光寺平の南のはて姥捨附近からも望むことができ、四季、折々の変化に平に住む人達の話題になる山であり、西麓には、延喜式内社、高社神社が鎮座し、里宮の上の社は、今も「遼拝所」と呼ばれている。南面する大沢爆裂火山口壁には、一枚岩、屏風岩、長刀岩、天狗岩などと、山体より突兀と見え、神が降臨する山、磐座が構成されており、自然神を崇拜した原始時代以来の祭祀の形態が、古代に於いては、神奈備山として繼承され、大場磐雄氏は、「（1）山容は、笠形乃至円錐形、（2）部落に近い平野部にそびえる端山の性格を有する山、（3）いづれも古来の大社が山麓に鎮座する」（『祭祀遺跡』）として全国の本宗は、大和の三輪山とされている。これが一般的な形態の山で、茨城県の筑波山、奈良県の二上山のような双耳峯の山も含まれているとされている。<sup>12</sup>

永藤清氏は、「出雲の場合、神奈備山は、中小の郡に一つある。農業共同体共通の祭祀で「くに」結合の役割をはたした後、大和王権の三輪山（三諸山）信仰が融合し、五世紀の人和王権の東国經營に大きく関わっているとされている。<sup>13</sup> さらに奈良県生駒郡斑鳩町の三室山、京都府綴喜郡田辺町薪にある甘南備山が有名（広辞苑）とされており、新井大ロフ祭祀遺跡の人々も大和王権の三輪山信仰と、古来からの高社山に対する信仰を習合させて、豊穣の祭を執行したとみたいのである。距離があって結びつきは困難であるが、長野市にも「三輪」があり、駒沢新町遺跡が存在する。このように、三輪山祭祀を司った王権が、東国に進出した際、人とともに信仰も移動して高社山が、神奈備山としての性格が、更に明確に附与され、これが七瀬古墳群の頭位方向の合同の規則に現われたとするのが私の仮説である。

このように七瀬古墳群の被葬者は、大和王権と交渉をもつた人々とみられるが、双子塚の被葬者の場合も農業共同体から成長した在地首長とみられ、これが前にも触れた通り副葬品の貧弱につながっていると思われる。

これに對して、先にみた右を用いて棺槨を造る（1）'～（4）'の古墳の頭位方向は、どうであろうか。（4）'の小丸山古墳の推定南北を除いて、石室の主軸方向は、東西である。また夜間瀬古墳群の石室の主軸方向は、南北で南に開口している。では合掌形石室の主軸方向を範囲を広げてみてみると長野市大室古墳群、大室谷、北谷支群では107号、東西、168号、356号、357号、北東<sup>14</sup>、長野市地附山1号古墳の主体部の3基、東西<sup>15</sup>、などの類例があり、同じ古墳群でも、時代が降るに従って、南北方向に主軸をとる石室增多が多いようで、この点では中野平のあり方と似ている。ところで更埴市森将軍塚古墳では、埴部に、多数の組合式箱形石棺がみられた。この方向性は、首長被葬者の位置と、これをさえた人々の関係を示すもので、単独塚の主軸方向とは意義が異なっており、長野市松代舞鶴山1号墳の、複数の主体部の主軸方向も、東西方向を示すが、五世紀前半の年代を与えられており、六世紀前後のこの地域の組合式石棺の出現期とは、時期が異なっている。

次に田麦林畔1号墳には、この地方では今の處、初見の巻を副葬されていた。巻と、引手の部分で

ある。これは実用的なもので、乗馬の風習に馴れた人程、簡単な装具で乗りこなし、または、使役することができ、奈良県藤の木古墳の豪華な馬具類は、儀式用とみられるが、乗馬に馴れない人程、装具が必要であり、金燈山古墳の馬具類は、環鈴や鈴、帶金具などが骨とともに検出されており、前者の段階より儀式用化し、被葬者の性格に隔絶性が感じられる。ともあれ馬具の副葬と石室墳には、馬の使役と石材の運搬の関係もあり、騎馬の風習に長けていたとされる、大陸からの渡来人の土着の問題などは、六世紀前後に出現した。この地域の組合式石棺の主軸方向と、それまでにみられた割竹形木棺墓の被葬者集団を仮に「神奈備山型」とすれば、前者に規制されないものを仮に「東西型」として、違った集団の墓制と思われるが、即、東西型と短絡せずに、多方面の検証が必要と思われる。

(擅原 長則)

#### 引用文献

1. 中野市教委 「前山古墳発掘調査報告書」 1957
2. 都出比呂志 「墳墓」『岩波講座日本考古学4』集落と祭祀 1986
3. 亀井正道 「祭祀遺跡 山と海」『日本の考古学』第七巻「歴史時代下」河出書房 1967
4. 水藤靖 「出雲・神名火信仰の源流」『東アジアの古代文化』 57号 大和書房 1988
5. 大塚初重 「大室古墳群」『長野県史考古資料編東北信』 1982
6. 長野市教委『地附山古墳群』 1988

## 5 七瀬4号遺跡をめぐる諸問題

今回調査された七瀬4号遺跡は、これまで古墳であろうと認識されていたが、その結果からその名称を北原墓址遺構と改めた。北原墓址遺構は、狭い丘頂上に営まれていた。このため大規模な土盛造構は伴わなかったが、立地からみて顕在化していたことは免れず、少からず破壊をうけている。1・3号遺構の中間地点も調査対象として発掘したが、最終的に墓址として確認するに至らなかった。1号遺構の回繞石は、南側を除いて残存し中の埋没土中に焼骨片が混入していた。この西方5m下の斜面に安山岩製の台石<sup>[1]</sup>（台座・基礎）が2つに割れて所在し、平面38cm（正面）×33cm（奥行）厚さ13.5cm～9.9cmで、正面には、両面より8.25cmの位置に左右1個づつの香華立と思われ穿孔（径2.5cm、深さ5cm）がみられ、その奥に30cm×20cmの平坦面を加工していて、この上に供養仏、石塔婆などの造立が想定され、立像の高さは60cm前後と推定されている。接地面と背面は、荒加工のままで、マウンドの前面に建立されていたと想像される。

3号遺構は、集石をもって造成され、円形のプランをもっていた。この埋土中からは、石鏡が1個発見されたが、他に焼骨片などは検出されなかった。このため有機質の骨蔵器が存在したとみられるが、盗掘をうけて埋置されていた骨蔵器が、持ち去られた可能性が考えられる。これは1号遺構の乱掘にも通じている。

さてこの墓址遺構の類例を近くに求めると、市内安源寺地籍の県道拡幅工事によって昭和41年（1977）に、緊急発掘が行われた際、土葬墓4基と火葬墓11ヶ所一群の検出があった。報告者の林茂樹氏は、「この火葬墓群は、南北1.4m、東西7.2mの狭く凹んだ墓域内に設けられた土塚と配壁遺構の中に10個体分の火葬人骨を各個体ごとに配列し、埋葬したもので、一定の配列状態が認められるところから、さして時間をおかず埋納されたものと考えられる。」として火葬墓11号址と12号址は、やや離れた位

置にあったが、ほぼ同時期とされている。<sup>12)</sup> この納骨行為は、I類、小石を敷き集めた特別の遺構を伴うもの（1号～6号、9号）、II類、枯上の盛土の上に小石のかわりに砂利等を充当させ、直接火葬入骨を集積したもの（7、8、10号）と分類されているが、このうち4、5号墓は、石を円形に配して火葬骨を上下に集積されていたとされている。<sup>13)</sup>

このように当地方では、中世中葉の頃、火葬の風習が存在したことが、この発掘によって認められたが、墓碑などと標示施設は、認められなかつたらしい。この火葬の風習について林茂樹氏は、近代都市を除いて火葬の風習を強く示す地域は、浄土真宗の布教された地域であるとされ、牛出地蔵に存在したとされている浄土真宗、本誓寺跡を指摘されている。また市内草間、茶臼峯の中世墓遺構が、水田客土の採土事業のため、昭和49年（1974）緊急発掘調査が行われ、柴跡のU字形土壘の北西部の隅からは、宝應印塔の笠の部分と五輪塔の地輪の部分だけが発見された。南西の隅からは、土壘を切り崩し、外に向って舌状の平面をつくり、地下30cmに、幅1m、長さ3m以内の同一レベル上に8ヶ所の火葬墓址が存在した。

I類、円形などに集石し火葬骨を埋納するもの（1、2、6号墓）

II類、盛土で平面をつくり、火葬骨を埋納するもの（3、4、5、7号墓）

III類、骨蔵器を有するもの（2号墓）

この場合は、安源寺例と共通する面が多くみられるが、特異点は、骨蔵器の存在と供養塔との関係である。ほぼ同時に両者が設置されていたかは、検討の余地を残しているが、遺物の年代からは、同時代性を或る程度認めることができ、脊造構の性格から推して、戦乱による死亡などを考慮して、「埋め墓」と「詣り墓」の存在を確認したいと思われる。武井正弘　さて武井正弘氏は、<sup>14)</sup> 集石墓は、一時的な複数の死で埋まらない最後を遂げた墓を弔う祝法であろうとされ、疫病などによる亡骸は火葬し、「石を並べて」崇り易い不運な魂の鎮魂を図り、この祝法は仏法によらず魂を祀る神祭の團い込の形式であるとされ、詣り墓（両墓制）の存在を考慮されている。宮田勝功、田阪仁、両氏の報告「三重県、横尾墳墓群」のA区約370基中、骨蔵器をもつ墓は、10数基で一石五輪塔の出現は、おおむね16世紀後半に、石塔類は15世紀以降に出現し、III区中段例では、墓の構成、地割りに規則性が認められるとしている。<sup>15)</sup>

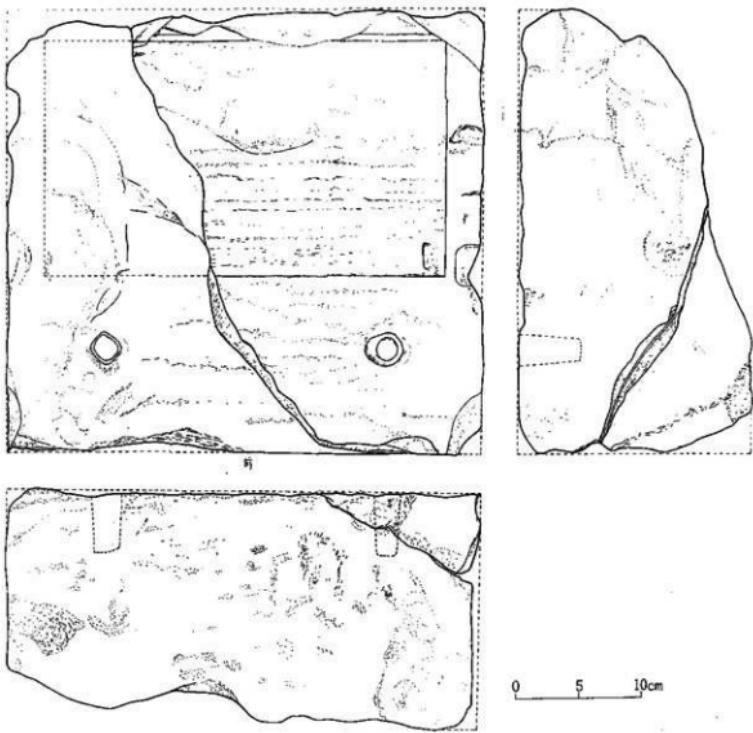
さて本例では、安源寺例と違って、石造物が出土しており、この面からの検討が必要となってくる。昭和初年、山城（京都府）本津惣墓を、二ヶ年に亘り精力的に調査された坪井良平氏は、(1)、仏像型類、供養碑は大型なれど、大きさは、年と共に小さくなる。初期で、3尺以上、徳川時代になると、2尺以下となる。墓標としては、古くから概して小型である。初期のものは、仏体の下に納を造り出し台座の硝穴に嵌め込む式で、慶長、元和を境に消滅して、その後は、硝なしで下端を平にして台座に安置する。(2) 背光型類 大きさは、年代が新しくなるにつれて小さくなる。慶長末年から2尺を割り、納が短くなつて台座省略、下部埋め込み式となる。(3) 方柱型類、扉蓋をもつ型式は、徳川初期、元和～元禄年間から石塔の頸部橢形形式は、貞享年間から初まる。【尖頭型類（板碑）、五輪塔型類、無縫塔型類は略】<sup>16)</sup>

また中世庶民墓地の典型として報告された京都府守護野郡田川町幾地「地蔵山遺跡」は、丘陵上の小山そっくり室町時代の火葬共同墓地で、外観上、(A) 五輪塔を置くもの(B)、石仏を置くもの(C)自然石のや大きいものを置くもの(D)、海浜のこぶし大の石を盛るものなどがあり、同じ庶民層といつても、名主層と作人層の階級分化が認められるとしている。<sup>17)</sup>

この様な諸例を参考に、本例を考察すると、まず注目されるのは、中野市有形民俗文化財に指定されている。七瀬五輪塔（總高119cm）の存在である。これは高井地方最大のもので、五輪塚（寿徳寺跡）より峯道の登り口の現位置に移転したとの伝承があり、また通称びょうしょ（廻所？）の共同墓地には、応仁三己丑正月二十八日在銘の五輪塔が現存する。これは室町時代に、この地に勢力を得た支配層者の存在を暗示し、調査地と寿徳寺址推定地とは、直線にして260m程の距離である。<sup>(8)</sup> が、現在、この寺跡なり五輪塚の葬地との関係を裏付ける史料に恵まれておらず、五輪塚の復元的考察も具体的には、なされていないのが現状である。破壊をうけている点残念だが、立地条件からみると、古米からの伝統の「山上他界」思想が生きる隔絶した地に、他の庶民墓を伴なわず存在することは、上層階級の人々か、宗教的特権を有する人の墓との推測を可能にし、年代的には、台座が納として前に香華を供獻する穿孔を有することは、後出的な要素をもっており、このような形式は室町時代以降に出現するとされており、坪井説では、慶長、元和以後に出現するとなっている。文化の地方拡散の時期差を考慮に入れても、徳川初期前後の時代設定が可能と考えられ、これに庶民墓が後続して築造されていない点を考慮して、この地域の宗教関係者、小領主層、農村の上層階級などの被葬者像の中から、地域史の掘りおこしによって具体的に把握できる日が遠からず訪れる日が待たれるのであり、中世から近世初期の、この地方の墓制も全国的な通例の中で推移していることを確認するものであり、近世以後は、特別の場合を除き、土葬墓が優越していたと推測されているが、中世から近世の変革期に、村や仏教の動き、習俗のうつりかわりなど、多くの方面からの究明が待たれるのである。

#### 引用文献

1. 軟質粗耗な輝石安山岩で、この地域では栗和田石といわれている。箱山産のものに似ている。
2. 中野市教委『安源寺』 1977
3. 前掲書 関考一「火葬墓」
4. 武井正弘「一の谷遺跡について」 稲史手帖14、11 名著出版 1986
5. 前掲書
6. 坪井良平「山城木津惣墓、墓標の研究」私家版 1932 「考古学」10~6 1939  
『歴史考古学研究』 ビジネス教育出版社 1984
7. 濑川芳則「中世庶民共同墓地における火葬普及の様相」—北河内の惣墓と藏骨器—  
『ヒストリア』第66号 1975 「日本考古学論集」6、「墳墓と経緯」吉川弘文館 1987
8. 川勝政太郎「丹後幾地の室町時代庶民墓地の発掘」『史迹と美術』329号 1962
9. 「信濃史料」補遺上巻428頁に永禄九年九月四日付の山田飛驒守右衛門尉に、高井郡大熊郷の替地として「堅田郷、田麦郷、寿徳寺」1の武田信玄宛行状（春日弾正忠泰）に登場するが、宗派、寺の建物の規模などは不明である。



第73図 七漸4号遺跡出土石塔台座石

## IV まとめ

すでに詳細に述べられているとおり、この報告書は1986年から1988年にいたる3年の間に実施された、長丘丘陵にかかる古墳の調査報告である。調査の結果、古墳とは考えられないものも多々あったが、この間に発掘された「古墳」は七瀬2~6号、中戸1・3~5号古墳の多きにのぼっている。

これらの古墳は、地元の金井汲次先生を中心に、榎原長副、池田実雄氏、それに市教育委員会の徳竹雅之氏らの手で調査されたものであって、私がかかわったのは七瀬3・4号古墳と名づけられていたものだけである。したがって、地元の先輩・碩学諸氏をさておいて私が「まとめ」を執筆するのはためらいを覚えてならない。しかし、諸氏の命令でもあるとの由なので、非礼を顧みみずあえてこれを認めさせていただくことにした。

### 1. 調査の結果

3年にわたる調査の成果は、すでに再三にわたって詳細に記述されている。したがってそれを再びここで要約するのは、屋上屋を重ねたのとえにひといが、行文の都合上、あえて簡単に調査結果を顧みておきたい。なおここでは、調査順ではなく、遺跡番号の順をおつてまとめることにした。

七瀬2号古墳は長丘丘陵の丘頂端部に位置した、径17m、高さ0.7mほどの小墳丘をもつ円墳で、その裾には、幅1.2m、深さ0.8mほどの周溝があがっていた。墳丘の南半はすでに崩落しており、埋葬施設も発見できなかった。同時性を示す遺物も皆無だったので、年代等は明らかでない。

七瀬3号墳も、丘頂部平坦面の端部に設けられた円墳で、その径はおよそ18.6m、高さ2.5mを計測した。墳丘は一部自然地形を利用して作った関係上、墳麓に設けた幅0.6mほどのテラス外方にある周溝はその北半にだけめぐっていた。U字形に近い断面をもつ周溝はおよそ2.2m、深さ50cm内外であった。墳頂部の径10mほどの平坦面下には、3基の埋葬施設があったが、すべて墓括内に割竹形木棺を安置したものだった。最初に設けられた第3主体部の棺は、長4.05m、幅0.45mほどのもので、北東頭位の若い女性が葬られたらしい。堅桶3、ガラス小玉181、滑石製白玉4、銅鏡1が出土し、ほかに腰刀子1、刀子1も伴った可能性がある。第2主体部は、2.4m×0.45mの木棺と推定され、堅桶5、鉄劍1、管玉1、ガラス小玉152、滑石製白玉135を出土した。最後に設けられた第1主体部は、長さ2.95m、幅0.5mほどの木棺であったが、遺物は発見できなかった。以上から、本古墳は5世紀中葉の築造と判断されている。

七瀬4号古墳との名のもとに調査された遺構は、調査の結果、尾根上に並列する三基の石組遺構であることが判明した。これは榎原長副氏の考察によれば、中世~近世初期の墓地であり、列島内にかなり普遍的にみられるものという。いまはそれに従っておきたい。なお、本文中で榎原氏はこの遺構群を、北原墓地と命名することを提唱している。

七瀬5号古墳も丘頂に築かれた、径20mほどの円墳で、その高さは南で1.7m、北側で2.5mを測ったというから、およそ2mほどと考えてよいだろう。墳麓には斜面にかかる東側を除き、幅2mの周溝があがっていた。墳丘内には3主体部が並列していたが、うち2基は割竹形木棺と推測されている。第1主体部は地山面まで掘り下げた墓括内の長さ2.5m、幅0.6mの木棺であった。副葬品は堅桶5以上、滑石製白玉192、短劍1であった。第2主体部は第1主体部の東0.8mにあり、塙を掘って安置さ

れた長さ4.05m、幅0.8mの割竹形木棺と推定された。棺の南端近くには盤形土師器が3点置かれており、その周囲から竹櫛9以上が出土した。ほかに滑石製白玉218、長大な直刀1が発見された。第3主体部は、第1主体部の西1.4mに位置する長さ1.75m、幅0.6mという小型の塚で、その底面は平坦だった。中央部から竹櫛3がみいだされている。なおこの土塚からすれば、組合式の箱形木棺の使用を想定することもできるが、調査担当者の現地での所見である棺不使用説に従っておきたい。なおこの古墳の外表から、鰐・壺・高环形の須恵器や土師器多数を得ている。これらの年代から、この古墳もまた5世紀後半期には築かれていたと判断された。

七瀬6号古墳は、2号古墳の南西35mの至近にあった径18m、高さ1.8mの円墳で、せまい溝がめぐっていたらしい。中央部にわずかに遺存した墓塚は、長さ4.8m、幅1.7mを計測し、そこから直刀片1を得ることができた。

七瀬古墳群がのる長丘丘陵の西1kmにある千曲川ぞいの丘陵上にあったのが、田麦中戸古墳群だが、1・2号古墳と3~5号古墳とは、別の支群を構成していると判断されていた。

中戸1号古墳は、直径7.5m、高さ1mほどの小円墳と推定された。墓塚は砾層に掘りこんで設けられた2.5×0.65mほどのものであった。ここに安置されたのは2×0.6mほどの箱形木棺だったと想定された。元位置を離れた土器片3点を得ただけだが、7世紀の所産と推測されている。この北30mには、かつて2号古墳が存在したが、その痕跡も探し出すことはできなかった。

1号古墳から150mほど離れた尾根上に、ほぼ10mの間をおいて3・4・5号古墳とされたものが存在した。うち3号古墳とされたものには、1辺3.5mほどの方形をなす列石がめぐり、高さは0.7~1mほどであった。封土下の地山上に1mほどの広さの石の集中する部分があったが、明確なものともいいがたかったという。4号古墳とされたものは、1辺6.5m、高さ0.6mの方形プランを呈するもので、とりわけ明確な埋葬施設、遺物はみいだせなかった。

5号古墳とした小さな地彌れも、調査結果では造構としての明確な根拠は得られなかった。これらを総合して、調査者は中世造構との推理を行なっているから、古墳の将から外す必要がある。

## 2. 長丘丘陵古墳群の意識

七瀬双子塚古墳の埋葬施設は、墳頂部に割石などが全く見あたらないところから、粘土構のようなもので、竪穴式石室とは考えられない、との意見が早くから存在した。主体部の調査がおこなわれていないので確かなことはいえないが、近年の長丘丘陵上の古墳調査の結果からするなら、その蓋然性はきわめて高いといわなければならなくなつた。田麦1・2号古墳、厚貝山の神古墳そして今回の七瀬3・5号古墳など5世紀から6世紀初頭に位置づけられる古墳の埋葬施設が、ことごとく割竹形木棺直葬だったからである。

ところで、七瀬双子塚古墳に先行する首長墓は、長丘丘陵の古墳群と盆地を隔てた彼方に対峙するかにみえる、蟹沢、高遠山古墳だという。そして近年新潟県下の考古学研究者には、前方後方墳である蟹沢古墳を、同じ墳形の飯山市勘介山古墳とともにこの地域最古の古墳と見做したうえで、新潟県方面から影響下に成立したと想定するむきが強い。たしかに、飯山市柳町遺跡や、中野市安源寺遺跡の4世紀に遡る土器には、北陸から搬入されたものやそれを模作したものが顕著で、この方面とのかかわりが深かったことを物語っている。もし勘介山古墳や蟹沢古墳が北陸地方の影響のもとに築かれたものであるなら、その埋葬施設は木棺直葬であった公算が大きい。新潟県最古の古墳の一つである

山谷前方後方墳など、北陸地方の古式古墳の埋葬施設は、木棺直葬ないし粘土施設をもつものが一般である？これに対して善光寺平の古式古墳そして松本市弘法山古墳を含めて、長野県内の古式古墳の埋葬施設は、圧倒的に竪穴式石室なのである。もちろん、蟹沢古墳などの埋葬施設が何であるかは、いまのところ知るよしもない。したがって事の真相究明は将来にまたねばならないが、蟹沢古墳と同じ山丘の尾根上にある径20m、高さ3mをはるか円墳である桜沢4号古墳には、板石を小口積みにした小規模な石室がみられたという点は重視してよい。もしこれが正しければ、蟹沢古墳の施設も竪穴式であった公算を否定しさることはできなくなるだろう。もしそうであるなら、中野市域の古墳もまた、他の北信の古式古墳と同じ系譜につらなることになろう。それでは、木棺を直葬したといわれる七瀬双子塚にいたって、新潟県方面の影響が及んだというのであろうか。おそらく現在までの資料によるかぎり、それは困難である。やはり勘介山古墳や蟹沢古墳の埋葬施設が明らかにならないかぎり、論議は進まないであろう。

山ノ神古墳・林畔2号墳そして今回調査された七瀬3号・5号古墳の埋葬施設からみて、七瀬双子塚古墳の木棺が削竹形であった可能性は大きかろう。ところが、長野県や山梨県などの4世紀型の古墳は、竪穴式石室を原則とし、木棺直葬ではない。しかも使用された木棺は、箱形であったと想定されている。石室の床は、まったく平坦で、削竹形木棺を安置するための粘土床などはみられないからである。関東地方の古式古墳は、北陸地方同様木棺直葬である場合が多い。しかしここでも初期のものに削竹形木棺は見あらず、箱形木棺であつたらしい。東日本の4世紀型の古墳は、箱形木棺使用が通常だったようである。ところが、北陸地方の場合はやや複雑な様相となりそうである。富山县最古といわれる国分尼塚1号前方後方墳、これまた4世紀の古墳という谷内16号前方後円墳などの埋葬施設は、削竹形木棺の直葬だったという。しかし、長野県北部の古墳に影響を及ぼしたと考えられている新潟県下では、山谷前方後方墳の埋葬施設が関東地方同様、箱形木棺の直葬だったと反証するのである。

東海地方や関東地方では、直葬される木棺が削竹形にかわり、粘土施設を伴ったりするようになるのは、4世紀後葉以降と考えられ、ほぼ時を同じくして東海系土器にかわって畿内系土器の影響が強まるようである。ところが長野県下の場合は、5世紀に入ても善光寺南部の、例えば更埴市土口将軍塚古墳や長野市越将軍古墳、舞鶴山1・2号古墳にみられるように、依然として床の平らな竪穴式石室が設けられており、削竹形木棺はみられない。七瀬双子塚古墳にみられるように、依然として床の平らな竪穴式石室が設けられており、削竹形木棺はみられない。七瀬双子塚古墳とほぼ同年を同じくする小古墳である森2号古墳もまた同様である。そして、いまのところ県下で石室を設けず削竹形木棺を使用したのは、中野市域とりわけ長丘丘陵一帯と、フネ古墳で知られる諏訪地方だけである。しかし、現在の資料によるかぎりそれも5世紀に入ってからのことだったのである。

ところで、七瀬の古墳群が形成された5世紀の畿内に目を転じると、ここには削竹形木棺とそれを被覆する粘土棺とが盛行している。甲冑や武具を数多くおさめた大阪府大塚古墳や京都府ニゴレ古墳などは、近ごろ著名な古墳だが粘土棺を使用している。だがこれらは大きいとはいえ円墳である。そして大型前方後円墳の埋葬施設は、このころ長持形石棺などに移行しており、削竹形木棺と粘土棺は陪葬的存続化していたことも知られている。そして都出比呂志教授は、これをヤマト王権の強化とともに生まれた棺の使用規制の結果と推測し、当時「棺制」というべきものまで存在した可能性があるとされているのである。

ここでふたたび長野県下の割竹形木棺をもつことが確かめられている古墳に目を転じるなら、それらが中・小規模の円墳あるいは方墳であることに気づくだろう。5世紀の畿内で、大型古墳に従属するように配置されたいわゆる陪塚に方墳が多いことをも考えあわせるなら、長丘丘陵に古墳を営んだ人びとが、ヤマト王権下に成立した「棺制」をそのまま受容したかにみえてくる。おそらくかれらはヤマト王権と深いかかわりをもちつつ、王権を支える勢力と位置づけられたのであろう。双子塚古墳の被葬者こそ、その統轄者だったのではなかろうか。

善光寺平南部を中心にみられた前方後円墳は、5世紀の末を境にこの盆地からすべて姿を消してしまう。これを在来首長層の没落の結果と理解してよいとすれば、ヤマト王権の拠点ともいいくべき地歩を固めた中野市域の勢力も、そのような傾向を促進させたのかもしれない。問題は、中野市域のこのような動向が、どこを通じて展開したかということだが、いまのところそれを知ることはできない。5世紀のころの善光寺平は、その南部にも越後系統の土器がみられる。だがこれが越後勢力の波及と短絡することはできない。逆に中野市域が、千曲川ぞいという地の利から、越の地に睨みをきかせる拠点だったとも考えうるからである。今後の検討に期待したい。

長丘丘陵に古墳群が形成されてから、北信濃にはいくつかの変化があらわれる。前方後円墳が消滅してゆくのもその1つだが、これと入れ替るように、長野市大室では特異な一大積石塚古墳群が形成を始めるし、中野市金鐘山古墳にみるような、合掌式石室という異質な埋葬施設も展開を始める。にもかかわらず、長丘丘陵の古墳は、6世紀に入ると盛行するどころか、群集墳を形づくりることもなく築造を終えてしまうのである。そして横穴式石室墳をもつ古墳がみあたらぬ、数少ない地となるのである。このあたりの事情は、もはや政治動向の追跡からだけでは不十分で、環境上の問題と集落の動態などを加味しつつ、別途考察を深めるべき課題であろう。

### 3. おわりに

本報告書は、個別古墳の報告書の合本ともいいくべき体裁をとっている。もとより私はそれらに添削を加えたり、記述の統一を図ろうというような立場はない。読者には多少迷惑かもしれないが、それぞれの項を、それぞれの担当者が、それぞれの言葉で綴ったものとなっている。考察もまた、討議をへた共通見解ではない。もとよりこの「まとめ」もまた、私の放言である。各文章の末尾に氏名を明記して、實作の所在を明らかにしたゆえんである。もちろん、考古学が學問であるかぎり、厳密さは常に要求されるべきであり、記録は万人の利用に便であるよう配慮されねばならない。その点本報告書が十全のものとはいえない点は自覚している。だが逆に、地元の歴史を解明すべくそれこそ嘗々と時間を費してきた。多くの方がたの熱気が感じとれる本書は、ある意味では整備された調査機関の報告書よりも、示唆を受けることが大きいのではないか、とさえ考えたい。水い間伝えられてきた先祖の遺産ともいいくべき遺跡が、私たちの代で消滅してゆくことを冷感に受けとめるとき、調査に臨む一人一人の姿勢が問われねばならない。そして本報告書から、最も大切な情熱が溢れてくるのを感じるのは、私ばかりではあるまい。

(岩崎 卓也)

七瀬古墳群  
田麦中畝古墳群

発行日 平成元年3月  
編集 七瀬・中畝古墳群発掘調査団  
発行 中野市教育委員会  
〒383  
長野県中野市三好町1-3-19  
TEL (0269)22-2111  
印刷 高峰堂印刷

